

はじめに

陶磁器は、人類が初めて化学変化で造り出した道具で、1万年以上にわたって作り続け、今日も使い続けている唯一の物である。日本でも縄文土器から今日の磁器まで、模倣と習熟を重ねながら進化させてきた。特に中世では、大陸との交易が盛んになり、大陸の進んだ技術で作られた美しい陶磁器に魅せられ、それを真似ようと苦心が試みられた。その中から独自の技術や美意識も生まれ、大陸にも無い陶磁器も生まれ、桃山茶陶という新たな世界も創られた。

今回は、そのような急激に進歩した中・近世の陶磁器を、横芝光町という小さな町で出土した物だけを取り上げた。横芝光町は太平洋の波が洗う九十九里平野の中程にあり、北西部に下総台地が迫り、中世の遺跡(城跡)が多く分布する。その中で篠本城跡や中島遺跡など、大規模な中世遺跡が発掘調査されて来た。そこからは陶磁器をはじめとする中世遺物が多数出土し、この地に多くの人々が営んでいたことが明らかになった。特に陶磁器を見ると、瀬戸や常滑等の国産陶磁だけでなく、高価な中国製陶磁も多く出土し、この人々が経済的にも豊かであったことが想像される。

そのような、これまでに町から出土した中・近世の陶磁器を一同にとは行かないけれども、多くを披露し、この地の中・近世が豊かであったかを知って頂くとともに、なぜ、このような地域が出来上がったか、想像を膨らまして頂ければ幸いである。

目次

はじめに

一 中世

1. 貿易陶磁

① 青磁と青白磁、天目、褐釉壺	1
② 白磁	4
③ 染付	4

2. 国産陶磁器

① 瀬戸窯	6
小皿 碗 盤類 播鉢	
瓶子 壺類 香炉 花瓶	
② 瀬戸・美濃中世末から戦国期	21
③ 常滑	23
甕 壺 捏鉢	
④ 渥美	30
⑤ 土器	31
小皿 香炉 内耳土鍋 茶釜形土器	

二 近世

1. 瀬戸・美濃登窯	33
2. 京・信楽系	36
3. 肥前系陶磁器	37
4. 江戸後期の染付	38
5. 播鉢、卸皿	41
三 国内外の中・近世窯業地	42

おわりに

本図録は、令和2年10月31日から同年12月20日まで、横芝光町立図書館内町民ギャラリーで実施した「横芝光町出土の中・近世陶磁器」展の記録で、編集、執筆は社会文化課生涯学習班町民ギャラリー担当道澤明があたった。

一、中世

ここで取り上げる中世とは、平安時代後期、中世的陶磁器（古瀬戸、常滑等）が生産され始めた頃から、江戸時代の近世的陶磁器が生産されるまでの時代を差す。

1. 貿易陶磁

貿易陶磁とは、日本に輸入された陶磁器の総称で、主な産地は中国で、その他に朝鮮半島、ルソン（フィリピン）、安南（ベトナム）、タイ等からも入って来ている。町内からは篠本城跡、傍示戸城跡、芝崎遺跡、中島遺跡から出土していて、そのほとんどは中国製陶磁器である。中で最も多いのは青磁で、宋代から明代に中国中部の龍泉窯で焼かれたもので、次いで白磁があり、これも宋代から明代の北部定窯（系）と中部景德鎮が主な産地である。このほか、褐釉壺、染付、天目碗等があり、それぞれ産地が異なる。

① 青磁

中国で青磁が生産され始めたのは唐代からで、主に中部の越州窯で盛んに造られ、やがて全国に広がっていった。中でも宋代には龍泉窯で良質な原料が採れ、明代まで千以上の窯が築かれ、大量に生産された青磁の多くは日本へ輸出された。町内では中島遺跡から同安窯系櫛描文皿が出土し、これは12世紀頃で最も古く、次いで13世紀の龍泉窯系蓮弁文碗が多く、これには翡翠色から天青色など良い色のものが多い。最も新しいのは明代の稜花皿で、これをもって龍泉窯系青磁はなくなる。町内出土の青磁には、ほかに盤、皿、瓶などがある。

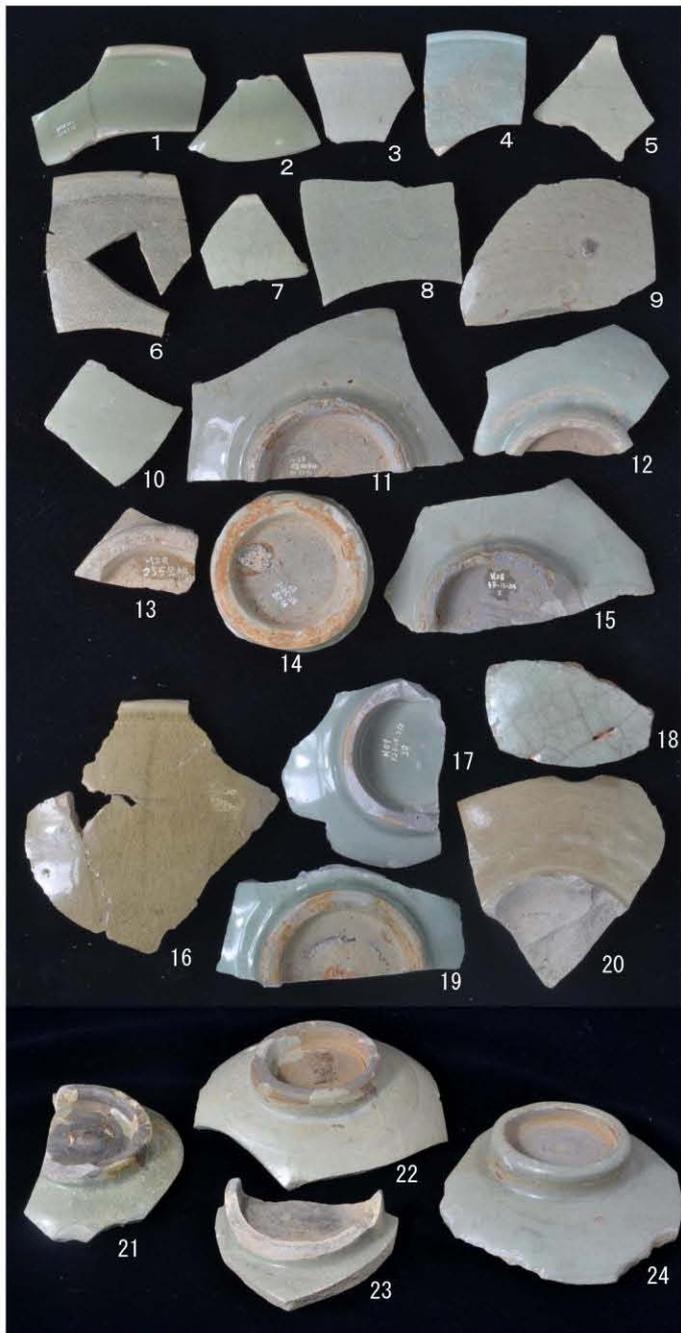


表面



内面

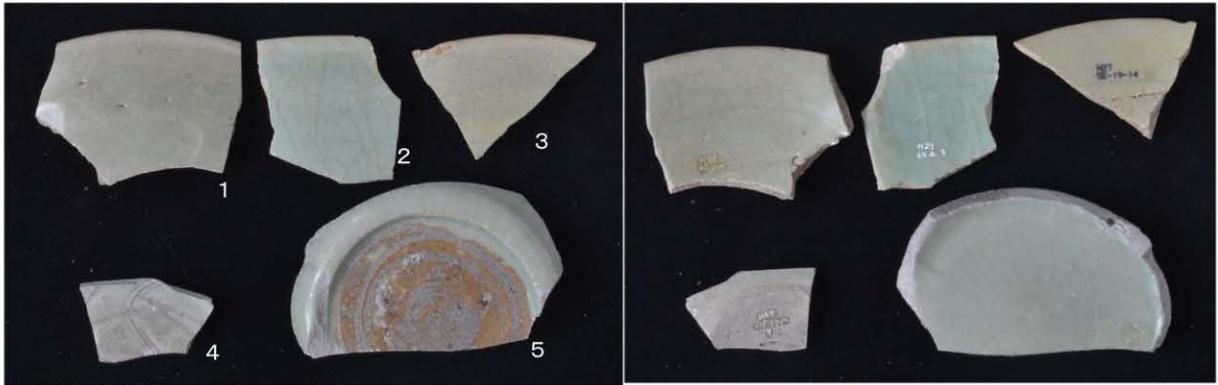
青磁蓮弁文碗(1～8篠本城跡、9～12神山谷遺跡、13～15芝崎遺跡、16～26中島遺跡)



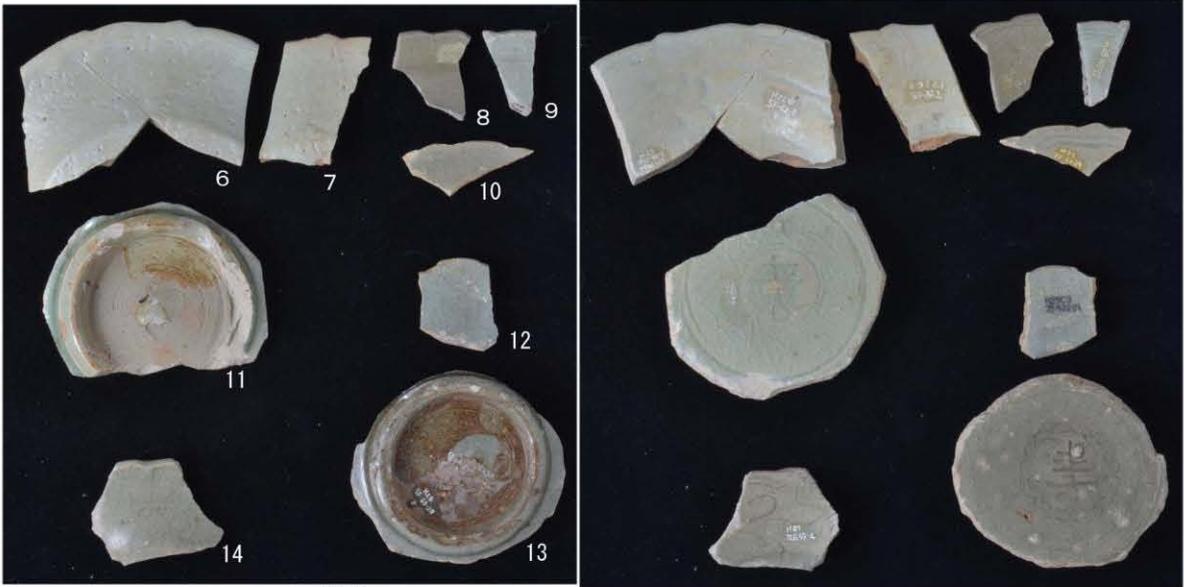
青磁碗(1~15・21~24篠本城跡、16新台遺跡、17~20中島遺跡)



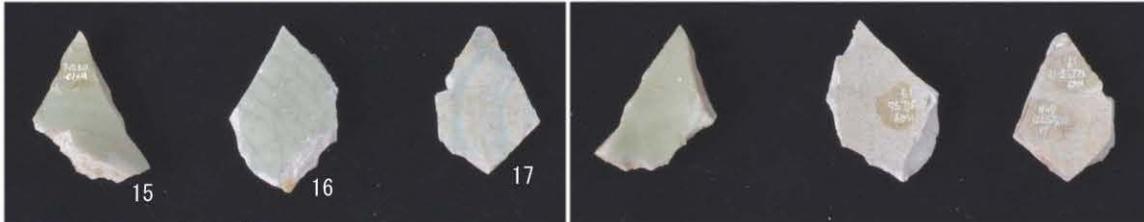
青磁盤(25~29篠本城跡、30芝崎遺跡)



同安窯系櫛描文皿 皿 (1 篠本城跡、2・3 神山谷遺跡、5 中島遺跡)
(4 中島遺跡)



稜花皿 (6~11 篠本城跡、12・13 神山谷遺跡、14 芝崎遺跡)



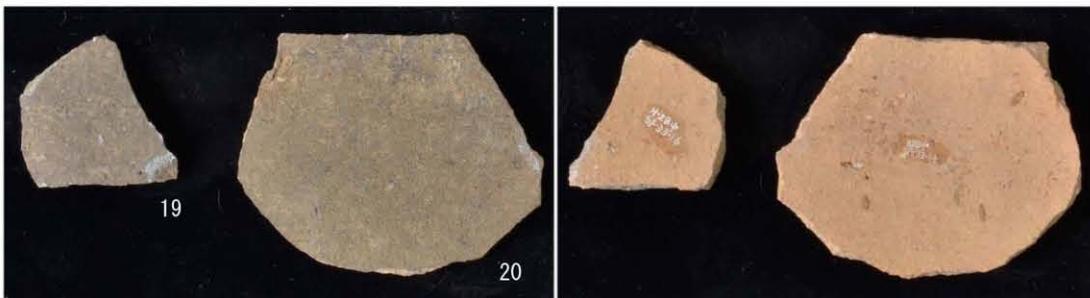
壺 (15 芝崎遺跡、16 中島遺跡)

青白磁梅瓶 (17 芝崎遺跡)



天目碗 (18 篠本城跡)

青白磁は釉に2%の鉄分を含んでいるとこの発色になり、青磁は5%であるという。青白磁は主に景德鎮で生産された。篠本城跡からは破片であるが、黒胎で茶色釉の天目碗が出土した。これはおそらく建窯と思われる、最高級陶磁の一つである。同窯の耀変天目3点は国宝である。褐釉壺の窯は不明であるが、中国南部と思われる。



褐釉壺 (19・20 篠本城跡)

②白磁

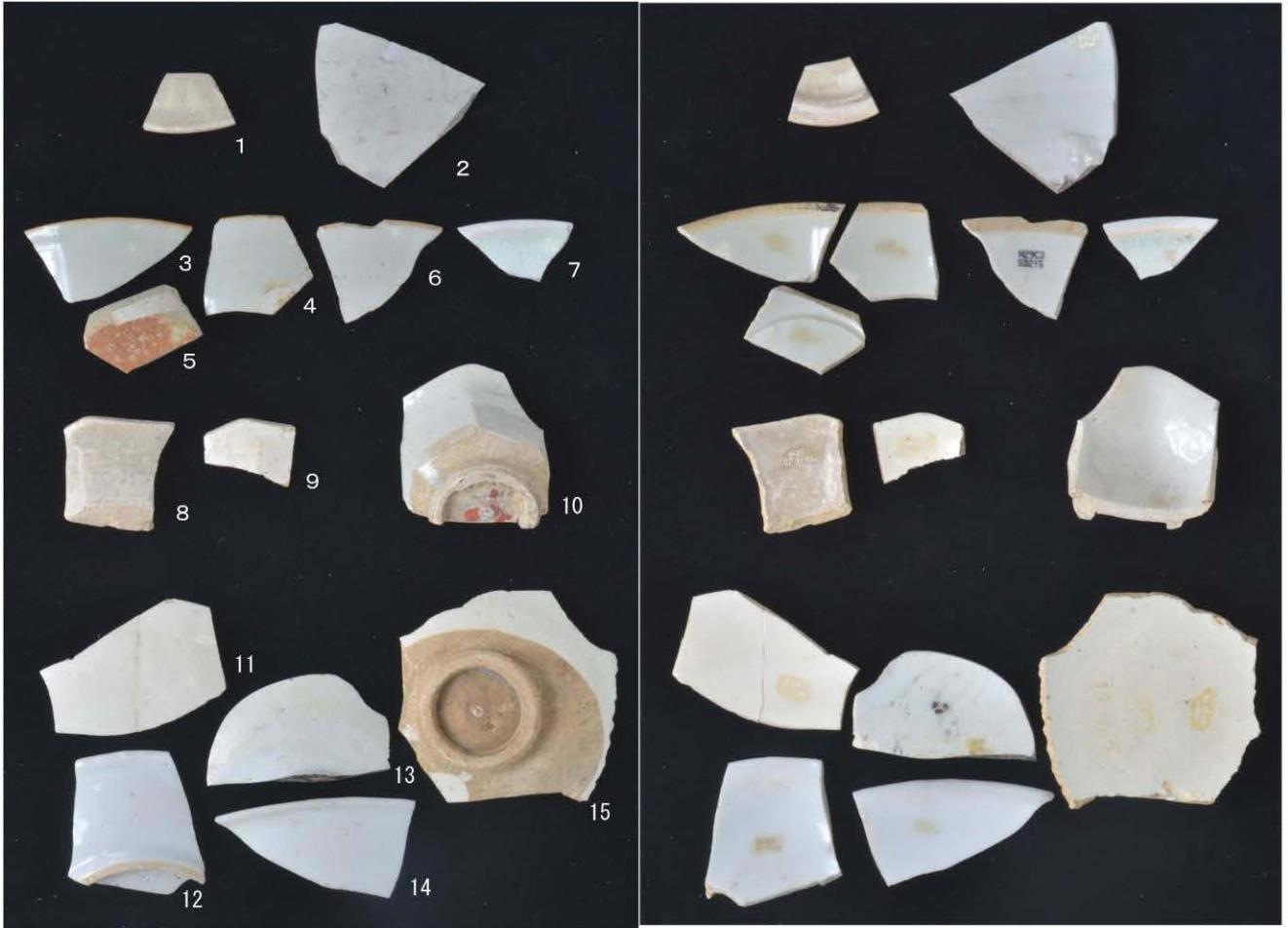
白磁も唐代から生産され始め、中国各地に広がった。町内で出土する白磁は、白色で磁質の景德鎮窯系と、乳白色で陶質の定窯系の2種類に分けられ、前者では唐代か五代の壺が最も古く、次いで元代の口禿皿がある。最も多いのは明代の割高台小皿で、これは景德鎮窯系と定窯系とがある。このほか皿、蓋、壺、丸杯や八角杯などがあり、篠本城跡が圧倒的に多く出土している。芝崎遺跡から出土した白磁壺片は12世紀の四耳壺と思われ、古代から中世への過渡期の資料と考えると興味深い。一方、篠本城跡出土の皿は15世紀代の製品で、すでに染付が景德鎮で生産の主流になっている時期であるが、染付でなくこの白磁皿の存在が需要者の趣向を反映させたものであるかも考えさせる。



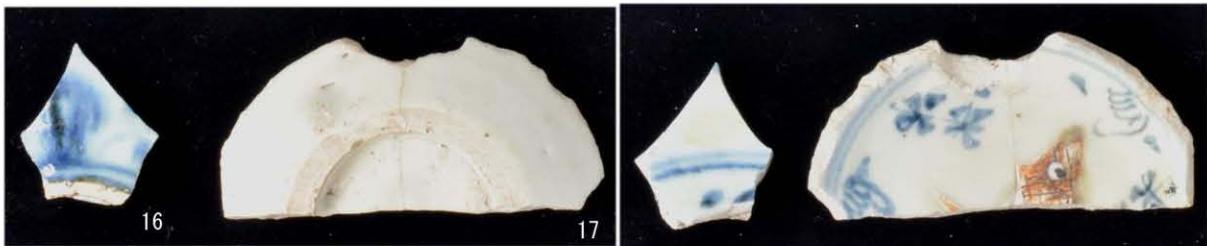
白磁割高台皿(1・3傍示戸城跡、2・4～30篠本城跡、1・8・13～16景德鎮窯系、他は定窯系)



白磁丸杯(31篠本城跡)



蓋(1中島遺跡)、四耳壺(2芝崎遺跡)、口禿皿(3~5篠本城跡、6神山谷遺跡、7傍示戸遺跡)
八角杯(8・9篠本城跡、10傍示戸遺跡)、皿(11~15篠本城跡)



染付碗(16) 染付魚藻文皿(17ともに芝崎遺跡)

③染付

染付は16世紀代の遺跡になると出土し、町内では芝崎遺跡から2点出土した。この2点は景德鎮の民窯で生産されたものである。



龍泉安仁溝窯の青磁窯



景德鎮湖田窯の民窯

2. 国産陶磁器

① 瀬戸窯

瀬戸窯は、平安時代末から今日まで、愛知県瀬戸地方を中心に生産された陶磁器産地で、最初は斜面にトンネル状に築かれた単純な構造の窯で焼かれた施釉陶器が生産され、戦国時代になると大窯というより効率的な窯で陶器が焼かれ、江戸時代には連房式登窯で磁器まで造られるようになり、今日に至っている。中世に窯で焼かれたのを古瀬戸と呼ばれ、生産時期と製品の特徴から大きく前・中・後の3期に分けられ、さらに各4段階に細分されている。古瀬戸製品では最も多いのが緑釉小皿で、次いで平碗、盤類(折縁深皿、直縁大皿等)で、生活必需品が優先された。

小皿

小皿では、縁に釉を施した緑釉小皿が最も多く、日常の盛り皿あるいは杯として使ったものか。また、中には紅皿として使ったと思われる皿もある。



緑釉小皿(篠本城跡) (1・5~7・10・11後期IV新、2~4・8・9
12・13後期IV古)



鉄釉小皿(新台遺跡)(後期IV新)



縁釉小皿(篠本城跡)(1~3・5~9後期IV古、4後期I、10後期III)



縁釉小皿(新台遺跡)(13・16後期IV古、15後期IV新、17後期II)



縁釉小皿(1~6中島遺跡、9・10傍示戸遺跡)、小杯(7・8中島遺跡)(1・5後期IV古、2~4・7・8後期III)



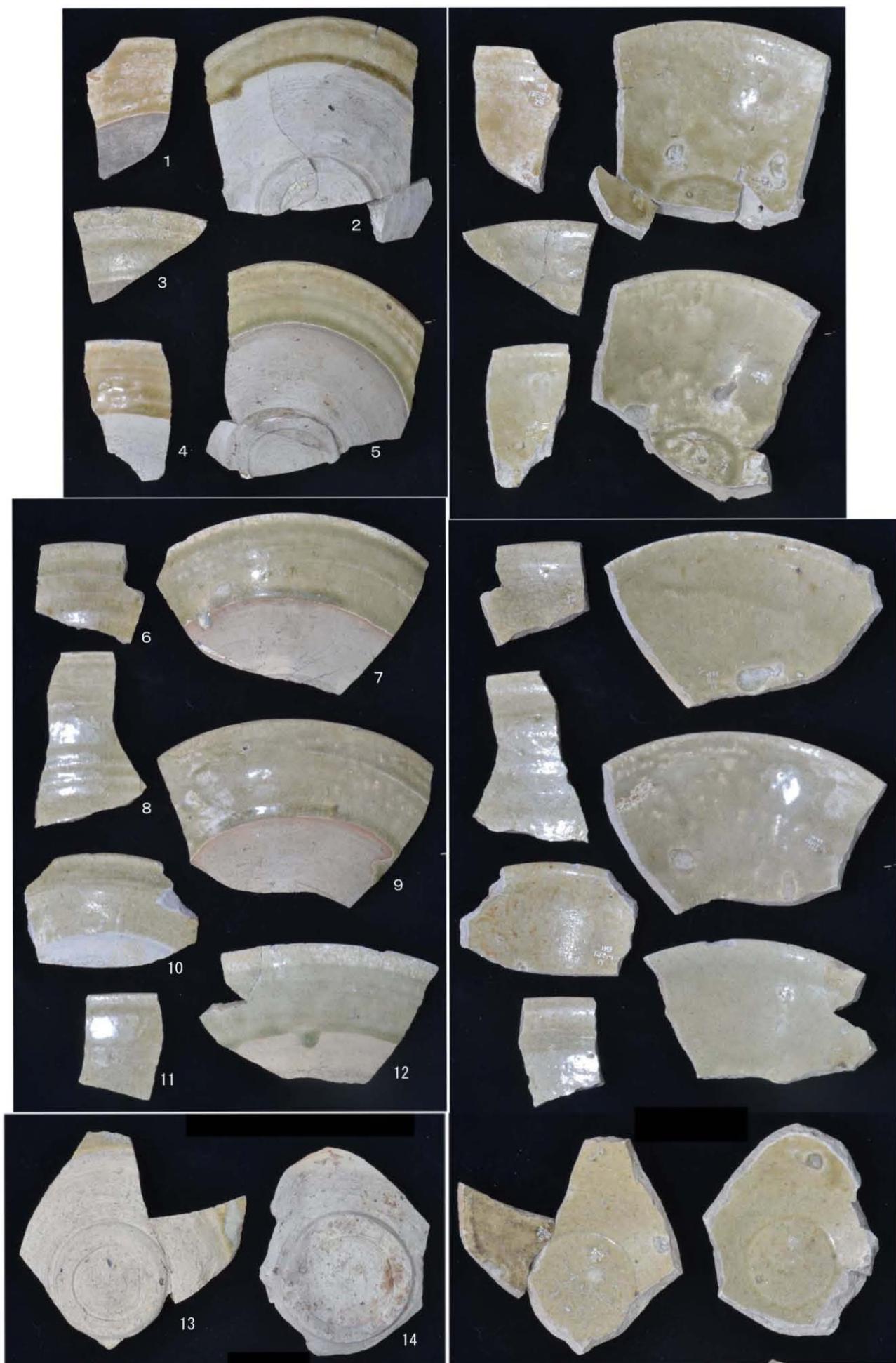
卸皿(11・12篠本城跡、13~15新台遺跡、16~19中島遺跡)(12・19志土呂窯製品)(11~16後期IV古)

碗

瀬戸の碗では、平碗と天目碗とがあり、平碗は中期から灰釉を施し開口した形であるのに対し、天目碗は鉄釉を施し口が立ち上がる形である。碗内には重ね焼きの時の目跡が3～4箇所あり、削出高台の中期末から後期のものが多い。町内では平碗は篠本城跡と中島遺跡で多く出土し、茶を嗜む武士階級の必需品であったろう。天目碗は中国製天目碗を模し、鉄釉を施して黒から赤茶色で、高台は削出で後期の新しい時期のものである。新台遺跡では灰釉天目が出土した。



平碗(1～3・6～10篠本城跡、4・5中島遺跡)(1後期Ⅱ、2・4後期Ⅲ、その他後期Ⅳ古)



平碗(中島遺跡)(1~7・9後期Ⅲ、8・10・11後期Ⅳ古、12後期Ⅱ)



平碗(篠本城跡)(1・5後期IV古、2・3後期III、4後期II)



天目碗(1~6篠本城跡、7~9新台遺跡、10傍示戸遺跡、11~14中島遺跡)(8は灰釉天目)
(1・2・5・7後期IV新、3・6大窯1、4・11~13後期III、9中期III、14後期II)

盤類

古瀬戸の盤類には、折縁深皿、直縁大皿、卸目付大皿などがあり、いずれも器高10cm、口径30cm程の大きい器である。直縁大皿はその名のように、縁が直立し、内面全体に釉が掛り、底に三点の足がつく。折縁深皿は縁に段を付け、口縁から10cm以内に内外面釉を掛ける。卸目付深皿は折縁深皿の内面に、粗く篋搔き卸目を付けたものである。いずれも盛器あるいは調理器であったと思われる。卸目付深皿は後期になると播鉢へと変化し、大窯期になるとなくなる。



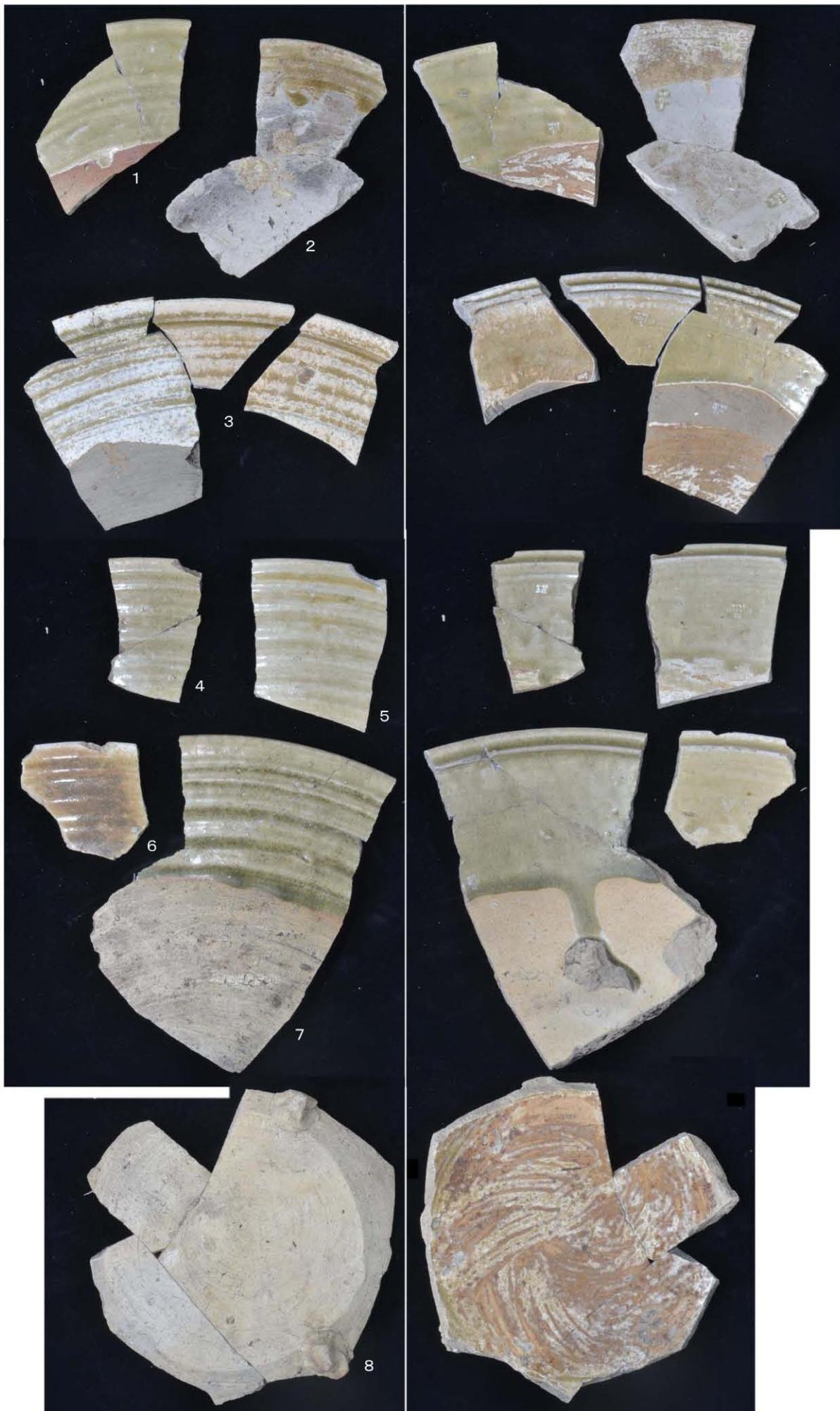
盤類(篠本城跡)(1・3～8折縁深皿、2直縁大皿)(1・2後期I、3・5・6後期IV古、4・8後期III、7後期II)



卸目付大皿 (篠本城跡) (1・2 後期IV古、4 後期Ⅲ)



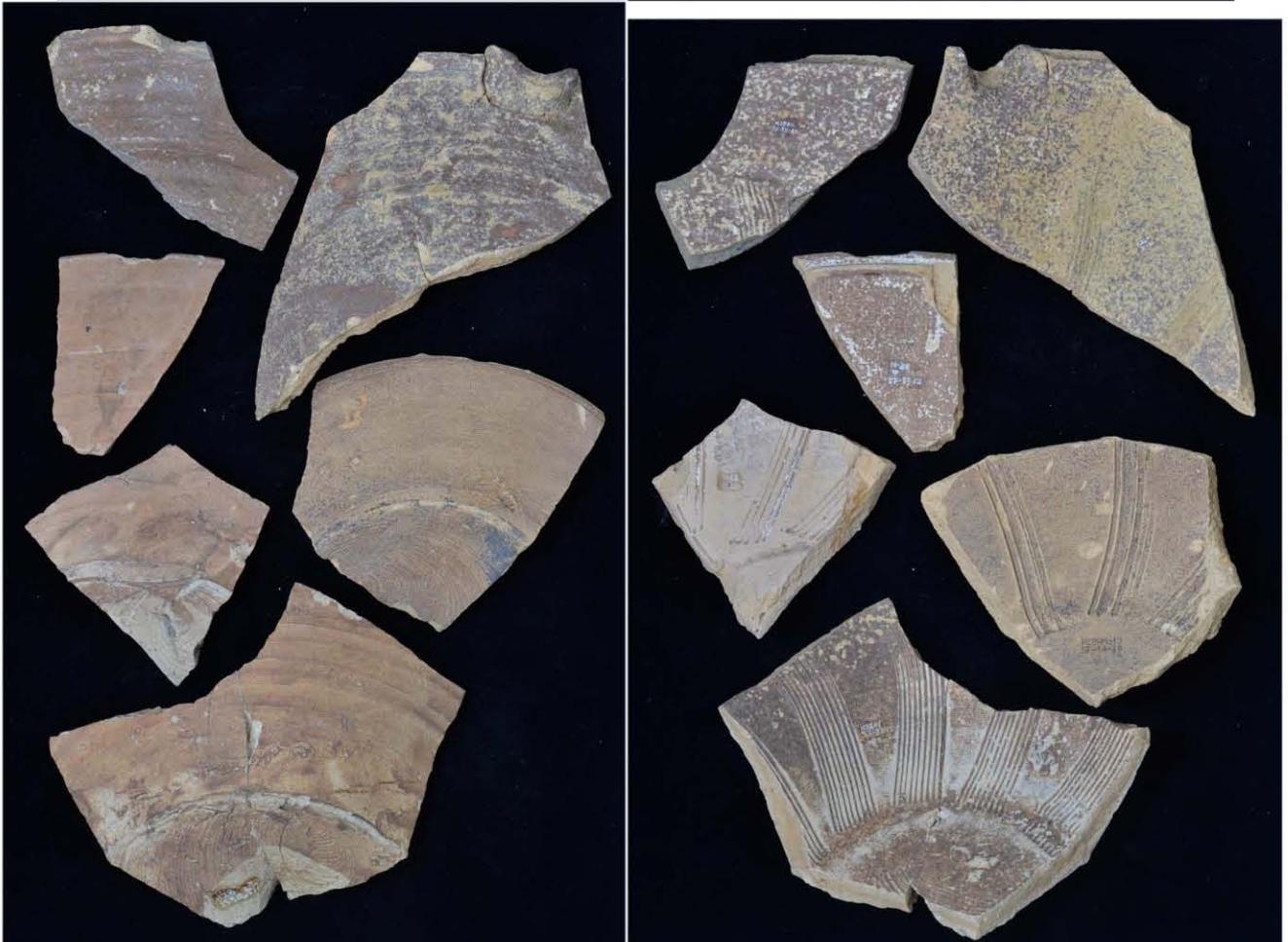
折縁深皿 (1~6 神山谷遺跡、7~10 新台遺跡) (2 後期Ⅱ、5 後期Ⅲ、7 後期Ⅰ)



直縁大皿と折縁深皿(中島遺跡)(1後期Ⅳ、2・4～6後期Ⅲ、3後期Ⅱ、7後期Ⅳ古)

播鉢

播鉢は、後期になって出現し、大窯に続く。播鉢は鬼板という鉄釉を掛けて黒く、内面に摺目を当初は粗かったが、次第に密に施していく。また、静岡の志戸呂窯製品も多く入っている。



播鉢(篠本城跡)(上段は瀬戸窯、下段は志戸呂窯)(いずれも後期IV新)



碗形鉢(中島遺跡)(中~後期)



捏鉢(中島遺跡)(前期か常滑6a型式、黒色付着物は漆)



捏鉢(篠本城跡)(後期I)



捏鉢(神山谷遺跡)



片口鉢(神山谷遺跡)



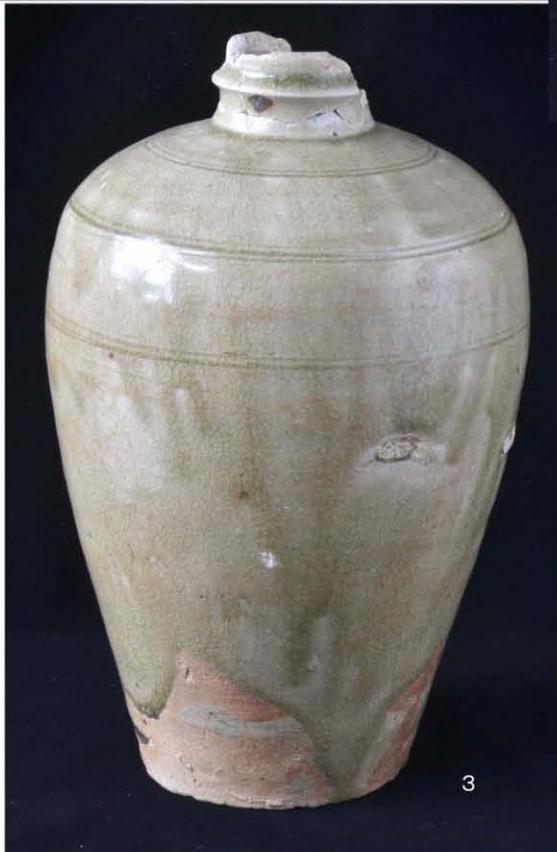
折縁皿(篠本城跡)(中期III)



瓶子・壺類(篠本城跡)(4・7・9後期III、13中期I、14前期IV)

瓶子

瓶子(梅瓶)は今で言えば酒徳利で、酒を注ぐ器であろう。篠本城跡では前期から後期まで出土しているが、決して多くはない。中期では線刻文様を描いた優品が、多く生産された。

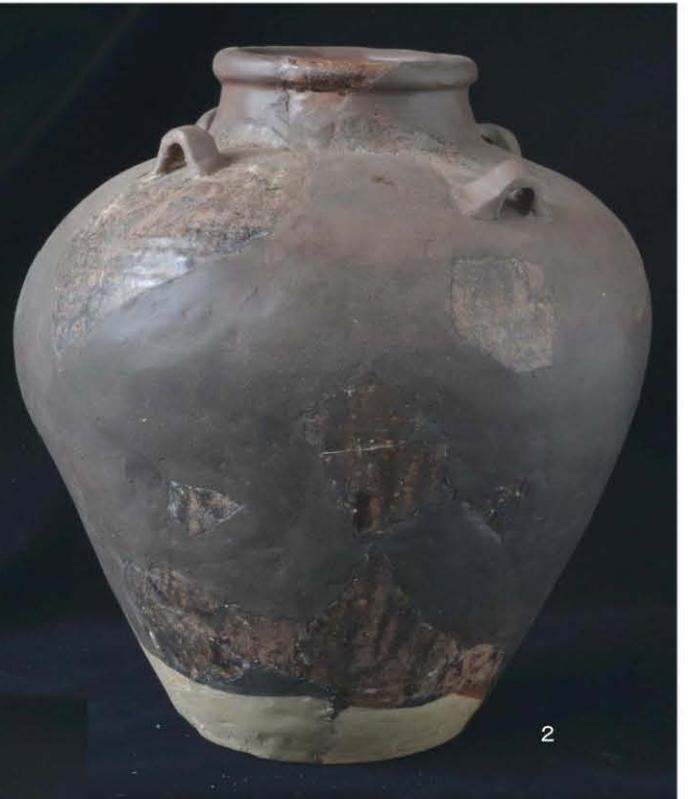


壺類

壺類には、四耳壺、茶壺のほか、茶入、水注、小壺などがあげられる。いずれも数は多くないが、茶壺だけは破片も含めて、どこの中世遺跡からも出土する。茶壺は肩に4点の耳があり、鉄釉を掛けて、黒から茶色で、祖母懐茶壺とも呼ばれる。



1
四耳壺(中島遺跡)(前期Ⅲ)



2



3
茶壺(2、3 篠本城跡)(2 後期Ⅱ、3 後期Ⅳ古)



4
広口有耳壺(篠本城跡)(後期Ⅲ)



5

茶入(新台遺跡)(志戸呂窯後期Ⅳ新)



6

水注(中島遺跡)(中期Ⅰ)



7

小壺(中島遺跡)(後期Ⅰ)



瓶子(芝崎遺跡)(中期Ⅰ)



瓶子(中島遺跡)(中期Ⅰ～Ⅱ)



小壺類(2・3合子)(1篠本城跡、2～4神山谷遺跡)
(1中期Ⅲ)



香炉

香炉は青磁を模して作った袴腰香炉と筒形香炉があり、いずれも底に3点の足が付く。釉は鉄釉と灰釉とがある。

香炉(1~4 篠本城跡、5 傍示戸遺跡)(1 後期 I、2 後期 IV 新、3 後期 III、4 後期 IV 古)

花瓶

花瓶は青磁を模して作っていて、下るに連れて口が朝顔状に大きく開き、台も開いて安定感が増し、本体は大きいものと小さいものがある。施釉は鉄釉と灰釉、飴釉とがある。



6



7



8



9



10

花瓶(6~9 篠本城跡、10 新台遺跡)(6 中期 I、7・9 後期 IV 古、8 後期 II、10 中期 IV)

②瀬戸・美濃中世末から戦国期

15世紀末から16世紀の戦国期になると、瀬戸地域では窖窯からより焼成に効率的な構造の窯を造り出した。これが大窯と呼ばれ、製品にも技術的な進歩と需要の選択が進み、小皿と茶碗を主とした小物の生産が多くなった。この中から茶陶への進化し、織部・志野に見る様な色物や柄物が出現する。町内では篠本城跡や神山谷遺跡、芝崎遺跡など、15世紀末から16世紀の遺跡で、大窯製品の皿、搦鉢などが出土しているが、瀬戸窖窯後期より少なくなっている。



窖窯後期～大窯製品

(1・2 緑釉小皿、3・4 腰折皿、5 丸皿、6 丸碗) (1～3 篠本城跡、5 神山谷遺跡、6 新台遺跡、4 芝崎遺跡) (2は挾皿) (1・2 大窯1、3・4 後期IV新、5 大窯2、6 後期II)



大窯製品 (12・13 腰折皿、7～11・21 丸皿、24 丸碗、14～20 折縁皿、22・23 菊皿) (9・10・21・24 篠本城跡、11・12・14～16・19・20・22 神山谷遺跡、7・8・17・18・23 芝崎遺跡) (7 大窯1、8 大窯3、17 大窯4前、22 大窯4、23 登窯前)



大窯期縁釉小皿(1新台遺跡、2傍示戸遺跡、3～7神山谷遺跡)
(1・2瀬戸窯、3～7志戸呂窯)

志戸呂窯

静岡県の金谷付近に志戸呂で古瀬戸後期頃から、古瀬戸を模して生産されたのが志戸呂窯である。しかし、志戸呂の土は鉄分が多く、瀬戸より少し赤みを帯び、少し重い。この時期、浜名湖北岸の初山でも焼かれている。

本町でも篠本城跡、神山谷遺跡、新台遺跡などで瀬戸製品に混じって、志戸呂窯製品がある。



大窯1期の播鉢(篠本城跡)



大窯播鉢(神山谷遺跡)

③ 常滑

中世では、瀬戸と並んで尾張陶磁のもう1つの優として常滑があげられる。常滑も瀬戸と同じ古代須恵器を源に、現在の常滑市を中心に知多半島全体に窯が築かれ、生産された無釉の焼き締め陶で、最近では知多とも言う。常滑製品は土に鉄分が多く、ざっくりとしているところから主に大甕が作られ、その主力は大甕と捏鉢であった。創業は平安中期で、中世を通じ現在も続く。その長期にわたる生産で、甕や捏鉢の形状に変化があり、中世だけでもそれによって1～11型式に段階が分けられている。しかし、16世紀になると、一時的に生産を止められたこともあり、近世では継続されるも中世の様な隆盛は無かったようである。



6b型式大甕



10型式大甕

常滑大甕2点(篠本城跡)



5 型式大甕



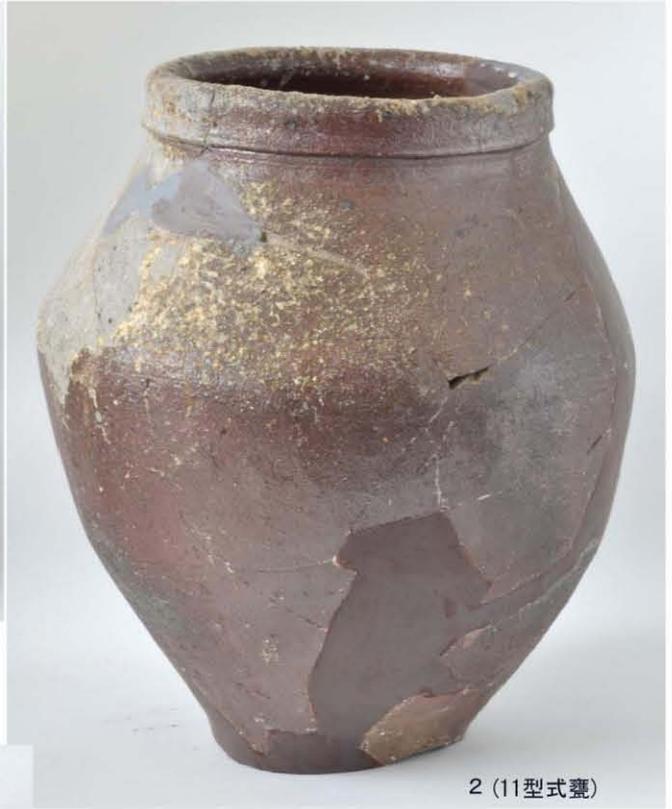
6b 型式大甕



8 型式大甕
常滑甕 (篠本城跡)



1(7型式甕)



2 (11型式甕)



3 鳶口壺 (6a型式) (内面には鉄漿が付着)



4



5



6



7

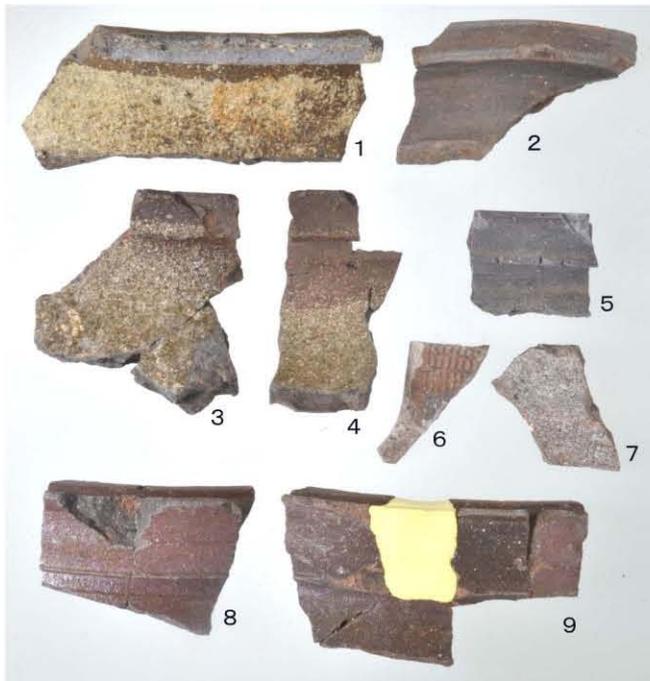
常滑甕・壺(1~5・7篠本城跡、6中島遺跡)(4・7-9型式、5・6-6a型式)



大甕(篠本城跡)(9型式)



4
常滑壺(1~3)・甕(4~6)(芝崎遺跡)(1~3-6a型式、4・5-6b型式、6-5型式)



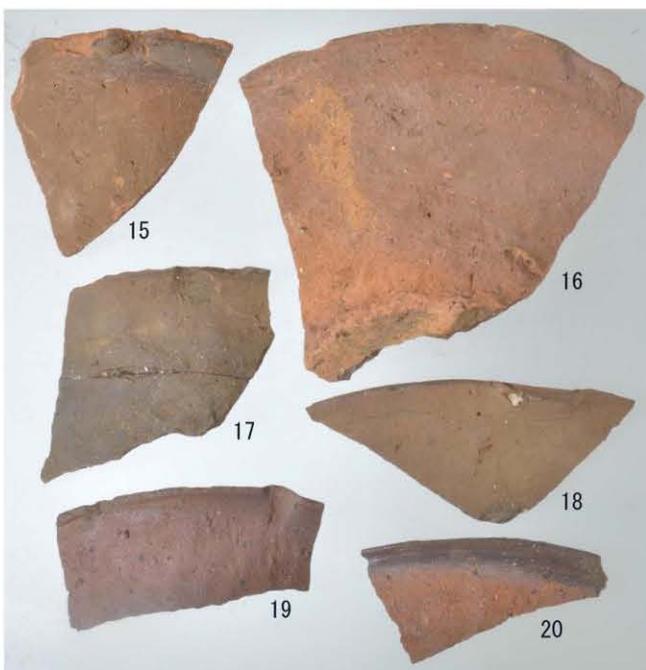
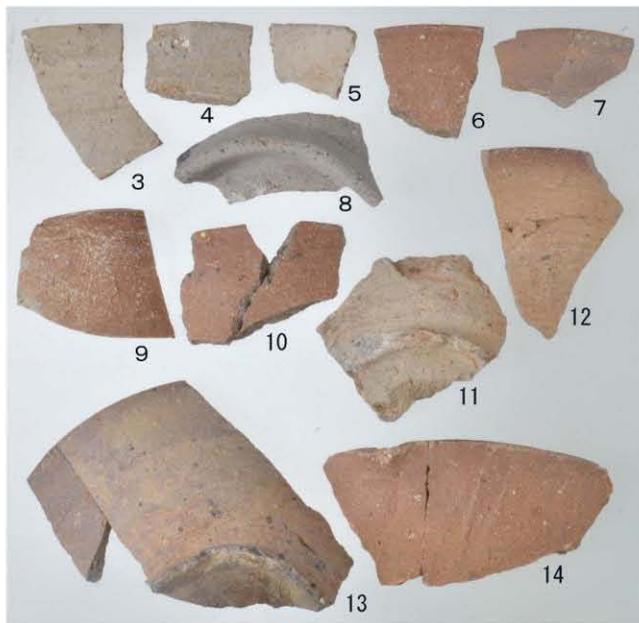
常滑壺(2)・甕(中島遺跡)(1・6・7-5型式、2~4-6a型式、8・9-9型式)



1



2



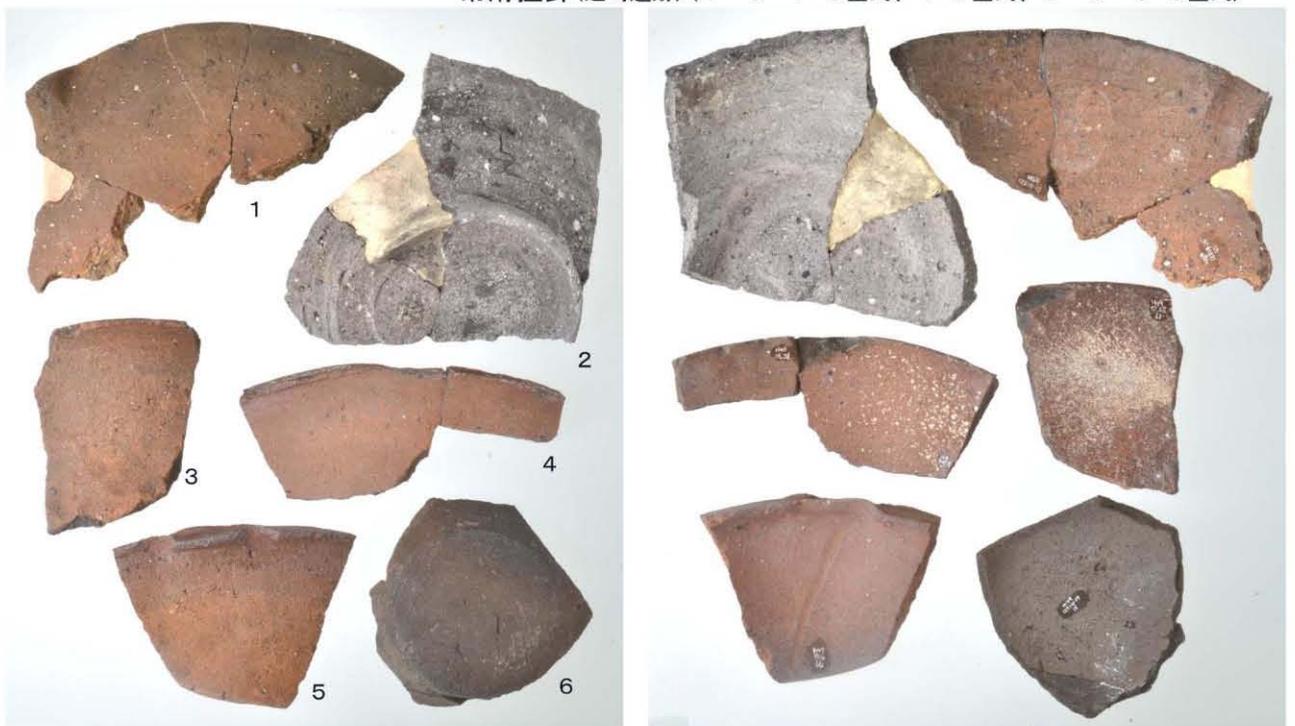
常滑捏鉢(篠本城跡)(1・3~4・11-5型式、2-6b型式、6・7・9・10・12~14-6a型式、8-3型式、15-8型式、16・19-9型式、17・18-7型式、20-10型式)



常滑捏鉢と備前擂鉢(3)(新台遺跡)



常滑捏鉢(芝崎遺跡)(1~3・7-5型式、4-7型式、5・6・8-8型式)



常滑捏鉢(中島遺跡)(1-6b型式、2-6a型式、3-7型式、4・5-8型式)



常滑の捏鉢は、初期段階から生産されていたが、15世紀後半になると瀬戸や備前などで播目の入った播鉢が生産されると、急激に需要が減り、16世紀にはほとんど作られなくなった。しかし、それまでの生産量は多く、町内遺跡でも多数出土している。古くは3型式、次いで5型式があり、この頃は口縁が丸く、高台が付き、灰色の物が多く、還元炎焼成されたと思われる。8型式になると口縁が角張り、厚手になって頑丈で、多くは赤色で酸化炎焼成になっている。捏鉢のほとんどは内面がツルツルになっていて、食べ物をこの中に入れて播り潰すのに使っていたことが分かる。

山茶碗は、生産地周辺では多量に出るが、遠隔地では非常に少ない。これは産地地元消費のために作られたと推定され、芝崎遺跡出土例は非常に貴重である。



常滑捏鉢(中島遺跡)(8型式)



山茶碗(芝崎遺跡)(5型式)



常滑小皿(篠本城跡)(7型式)

④ 渥美

渥美は、12世紀に文字通り渥美半島で生産が開始され、13世紀末には廃窯した中世陶器産地である。その特徴は平安時代の湖西窯須恵器の影響を受け、灰色で叩目状の押し印や線描き絵画などがある焼き締め陶で、常滑と違って胎土が砂っぽく細かいざらつきがある。町内では篠本城跡と芝崎遺跡、中島遺跡から出土し、遺跡の年代を測る上で重要な資料である。



渥美製品(篠本城跡)



渥美製品(1~5芝崎遺跡、6中島遺跡)

⑤ 土器

中世のなっても、素焼きの土器は継続して作られた。主にカワラケと呼ばれる小皿は、宴会等の1回限りの使用で捨てられるため、大量制作、大量消費であったと言われる。大きい物では内耳土鍋が中世後期になって、鉄鍋の代りに作られ、消費された。また、茶釜形土器も同様である。このほか瓦器があるが、あまり多くはない。



土器小皿(カワラケ)(篠本城跡)



墨書カワラケ(篠本城跡)



土器小皿(新台遺跡)



土器小皿(芝崎・中島遺跡)



土器袴腰香炉(篠本城跡)



土器筒形香炉(新台遺跡)



瓦器筒形香炉(篠本城跡)



内耳土鍋(篠本城跡)



内耳土鍋(篠本城跡)



内耳土鍋(篠本城跡)



内耳土鍋(新台遺跡)



茶釜形土器(神山谷遺跡)



茶釜形土器(篠本城跡)

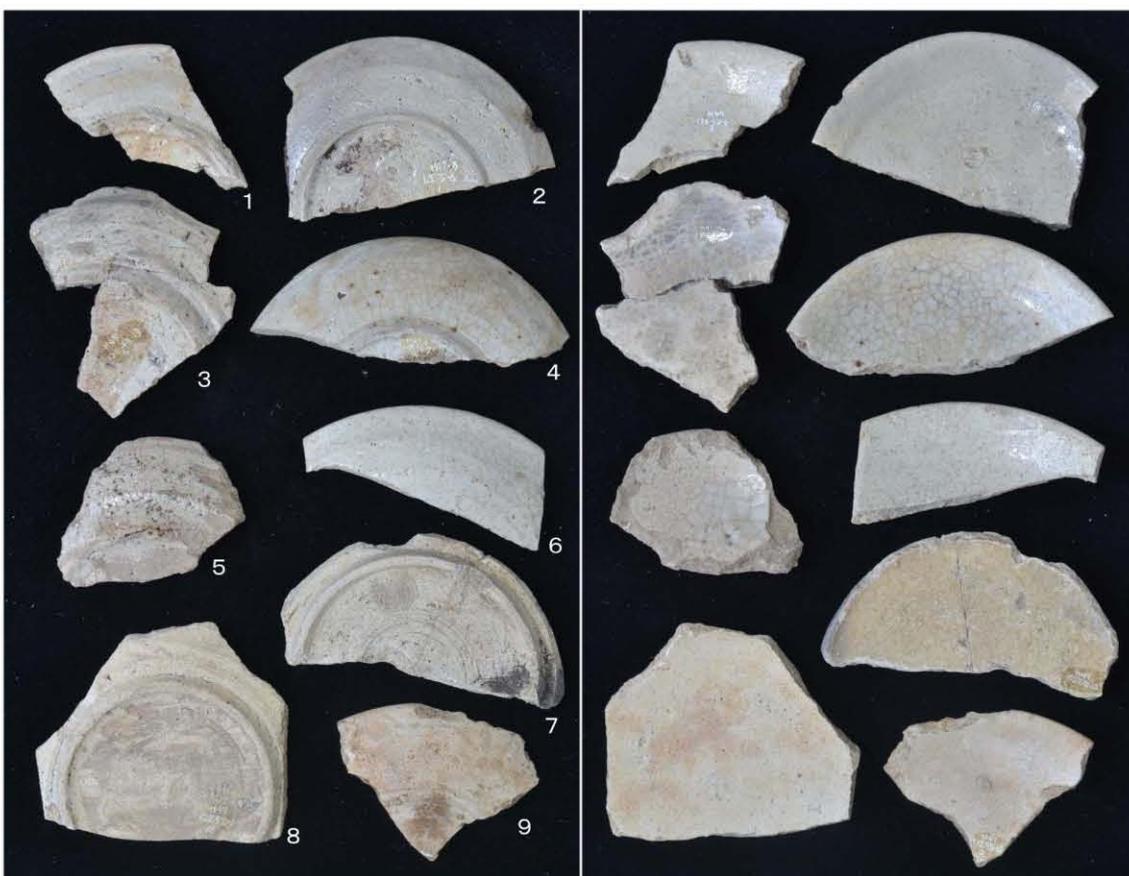
二 近世

1. 瀬戸・美濃登窯

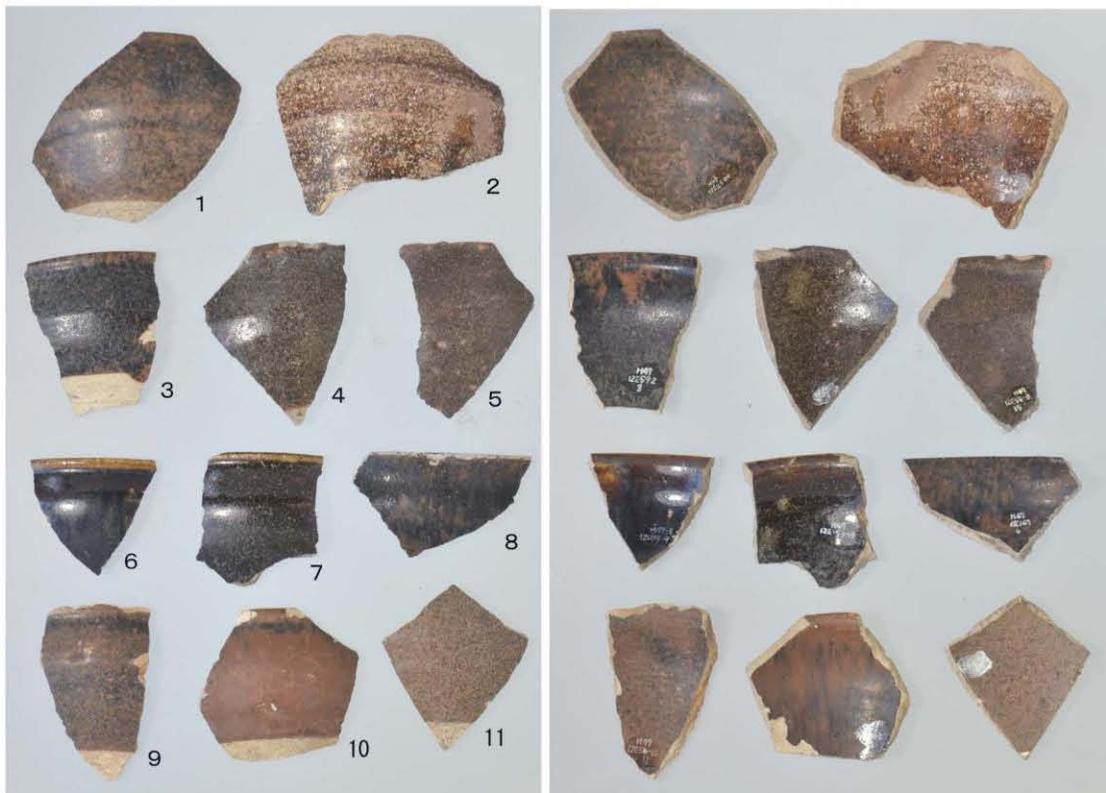
江戸時代になると瀬戸や隣接の美濃で連房式登窯が築かれ、織部、志野など、多様な茶陶が生み出され、この地域の陶器生産が飛躍的に発展した。その製品が町内でも芝崎、篠本でも前段階より多く出土している。江戸中期になると、品質の良い肥前陶磁器が入ると、瀬戸・美濃製品の陶器は衰退し、後期には瀬戸・美濃でも磁器生産を開始する。



瀬戸・美濃鉄絵皿(芝崎遺跡)(登窯前期)



瀬戸・美濃志野皿(芝崎遺跡)(3は大窯4、他は登窯前期)



瀬戸・美濃天目碗(芝崎遺跡)(1前期、2・3・5・10中期、8大窯3)



瀬戸・美濃丸碗と小杯(神山谷遺跡)(中期か)



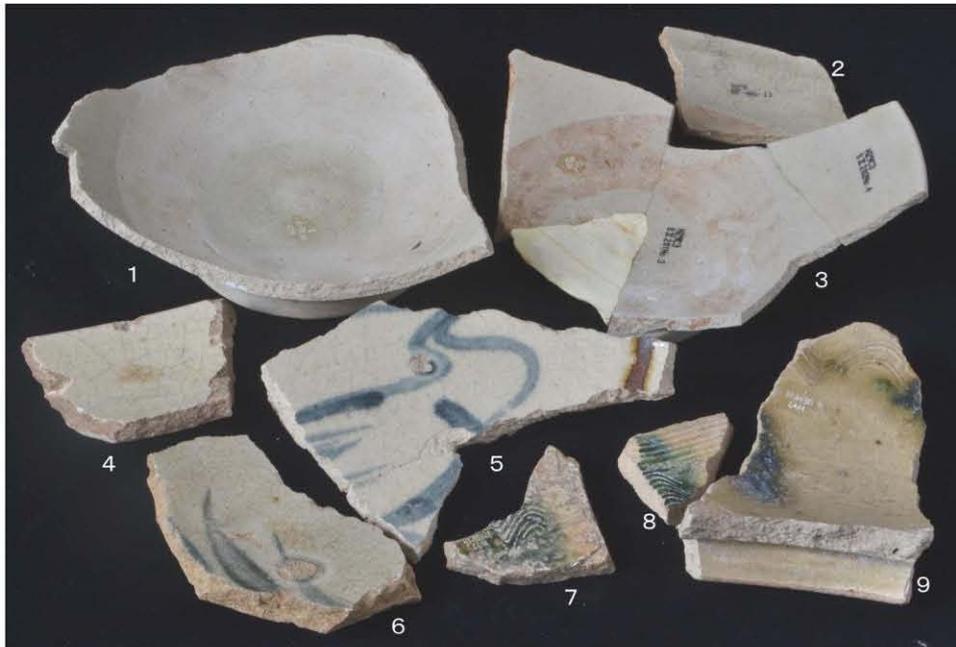
瀬戸・美濃碗その他(1~3 鎧茶碗、4 腰錆釉茶碗、5 御室碗、6 腰折碗、7~10 緑釉壺、11・12 三彩
13・14 白化粧地色絵土瓶蓋身)(1~6 神山谷遺跡、7~14 芝崎遺跡)(中~後期)

瀬戸・美濃用では、志野や天目茶碗等は江戸中期まで焼かれ、中期から後期にかけて腰錆釉碗が、後期には鎧茶碗が作られるが、中期から肥前磁器が広がるにつれ、瀬戸・美濃陶器は販路を失った。そこで後期には瀬戸・美濃でも磁器生産を開始し、広東碗や端反碗が主流となり、今日に至っている。

瀬戸・美濃ではこのほか、香炉、石皿、播鉢、灯明皿、徳利など、生活に必要な様々な器が生産され、そのブランドは今も健在である。



瀬戸・美濃志野織部鉄釉鉢(神山谷遺跡)(前期)



瀬戸・美濃皿類

(1・6～9芝崎遺跡、2～5
神山谷遺跡)(1～3灰釉皿、
4～6石皿、7～9黄瀬戸)
(中～後期)





香炉 (主に神山谷遺跡)

香炉

香炉は江戸時代全般を通じて瀬戸・美濃で焼かれ、それが町に入って来ている。主に筒形あるいは高台付の碗形で、灰釉から鉄釉、長石釉などが塗られ、内面は無釉である。



徳利

徳利は瀬戸・美濃でも盛んに焼かれ、主に灰釉を施した一升徳利や五合徳利など、容量が規格的なものであった。これは酒屋で酒を買った時に入れてもらう容器で、酒屋の専属で通り徳利と呼ばれた。



徳利 (神山谷遺跡)



灯明皿類 (主に神山谷遺跡)
(1~5 灯明受皿、6 油皿、7
・ 8 灯明皿、9・10 秉燭)
(後期)

灯明皿類

灯明皿類には、内面に稜のある受皿、縁に芯受が付いた皿、何も無い油皿、内面中央に芯立の付いた秉燭などがある。産地は瀬戸・美濃のほか、江戸等で焼かれた物もある。



2. 京・信楽系陶磁器

江戸の京焼と言えば、清水焼や仁清、乾山などが有名であるが、それらブランド物は町内からは出ない。しかし、町内からはわずかであるが、京焼が出土している。その特徴は胎土は密で、釉は鈍い光沢の透明釉が多く、中には鉄釉で柄を描いている物もある。その最も多いのが、杉茶碗である。



京・信楽系陶磁器(神山谷遺跡)
(2・6～8杉茶碗)

京焼は、その原土は京では産出せず、その多くは良好な陶土を産出する近くの信楽から取り寄せ、これを精製して使ったようである。そのため胎土はきめが細かく、比較的薄作りができ、精緻な焼き物となっている。しかし、胎土からは京焼か信楽かは判別できないところから、京・信楽系と呼ばれる。



3. 肥前系陶磁器

肥前系陶磁器では、唐津系の陶器と有田系の磁器とに大きく分けられる。江戸前期の唐津では赤褐色の胎土に白化粧土をかけた三島手や鉄絵を描いた絵唐津があり、後期には緑色釉をかけた上野焼がある。

町内では芝崎遺跡から唐津と思われる茶碗が数点出土している。また、上野焼と思われる碗、皿が芝崎、篠本等からも出土している。これは銅の緑青色釉を薄く掛け、胎土は緻密であるのを特徴とするが、産地は長く不明であった。比較的多く見られるのは、おそ

肥前系陶器(芝崎遺跡)
(13～18上野焼か、19～23唐津焼か)

らく肥前磁器といっしょに流通したためと考えられる。

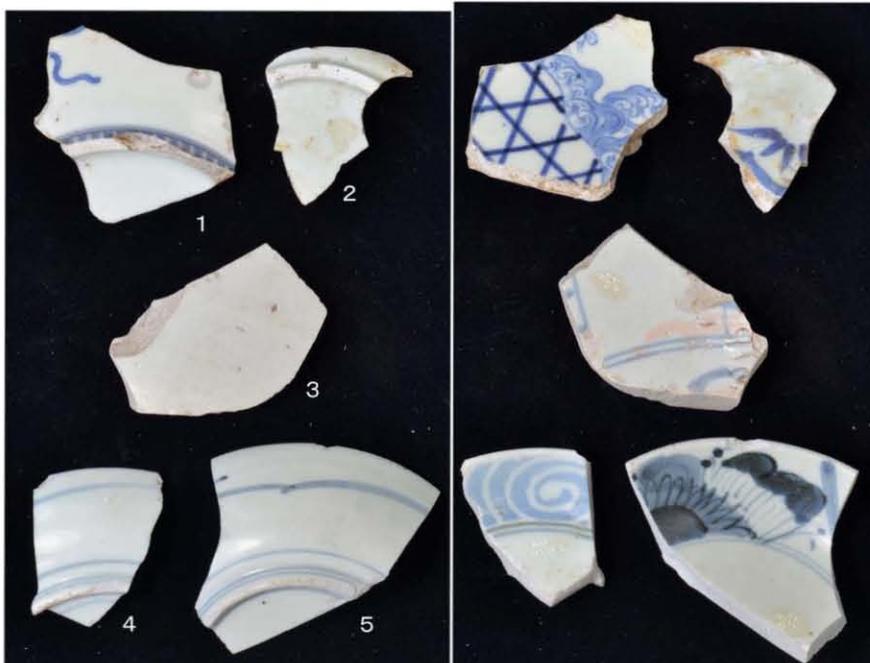
今日でもこの肥前系陶器には、唐津、上野のほかには小鹿田焼が有名で、それぞれ味わいのある特徴的な陶器が作られている。



肥前磁器は、16世紀末に有田で磁石が発見され、初期から中国磁器に倣って染付が生産された。17世紀のは初期伊万里と呼ばれ、やがて赤絵や色絵が付けられ、柿衛門様式や鍋島などの高級磁器が生まれ、贈答用や輸出もされた。

18世紀になると有田の南の波佐見で、より安価な磁器生産が開始され、これが庶民用として全国に波及して行った。

染付皿(芝崎遺跡)
(1は鍋島様式)



くらわんか碗(芝崎遺跡)



染付花瓶と廣東碗・くらわんか碗
(芝崎遺跡)





くらわんか碗と
広東碗(主に神山谷遺跡)

江戸中期になると、肥前窯では染付で草花文を描いた丸碗が多量に生産された。これで大坂の飯屋が淀川船で、飯喰らわんかと言ったことから、くらわんか碗と呼ばれたという。このくらわんか碗、主に有田の南の波佐見窯で焼かれ、安価であったことから、全国に流通した。



広東碗は18世紀後半から19世紀はじめに生産された染付碗、はじめ肥前で、後に瀬戸でも生産された。高台が高く、体部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、中国製碗を模したと思われる。



波佐見窯製の染付皿
(主に神山谷遺跡)





赤絵碗(1)と人形(2)、赤絵(3)
・染付爛徳利(4~7)(1・4・6
中島遺跡、2・3・5・7 神山谷遺跡)



染付け蓋(1~3)と紅皿(4)



4. 江戸後期の染付磁器

江戸後期になると、磁器生産は瀬戸・美濃諸窯でも開始され、茶碗など肥前に劣らない染付も見られる。左の端反碗の多くは瀬戸・美濃窯産で、19世紀前半代の物である。

染付端反碗(神山谷遺跡)(登窯後期)



瀬戸・美濃播鉢(芝崎遺跡)(登窯後期)

5. 播鉢と卸皿

播鉢

江戸時代の播鉢は、瀬戸のほかに、大坂堺で焼かれた物が多く入ってきている。これは元々備前系の流れをくむ、赤茶色の焼き締め陶で、縁が分厚く強靱な作りになっている。

卸皿

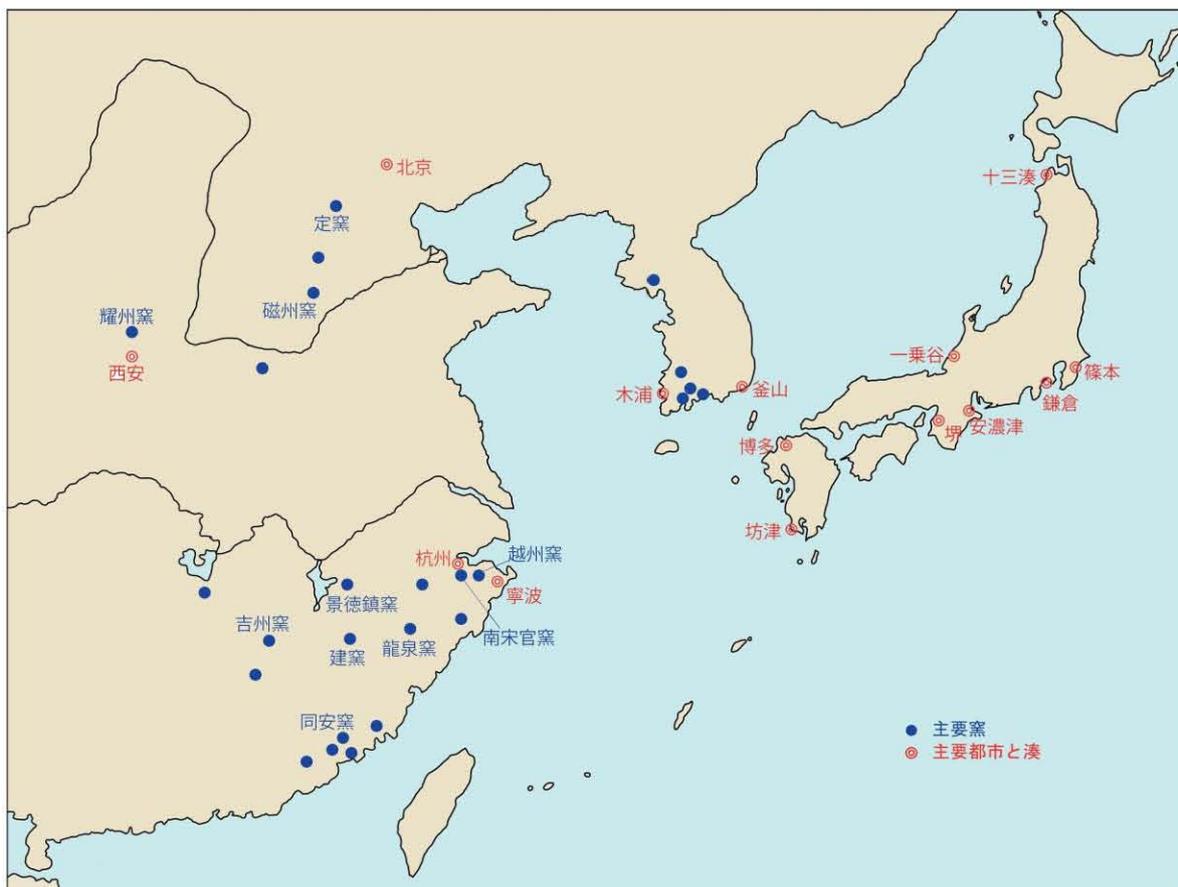
神山谷遺跡からは、方形の卸皿が2点出土している。いずれも鉄釉を施し、瀬戸・美濃産と思われる。



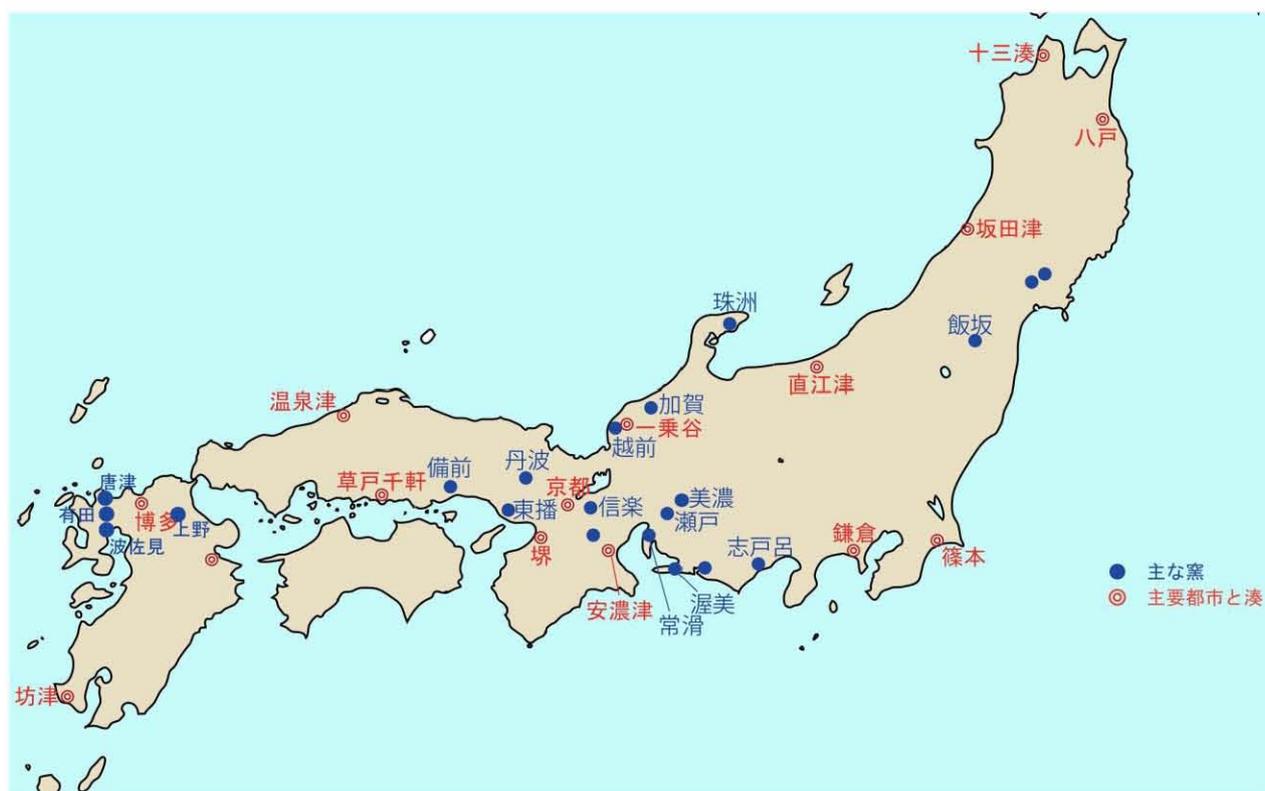
堺播鉢と卸皿(神山谷遺跡)



堺播鉢(神山谷遺跡)



中国・韓国の主要窯業地



国内の中・近世主要窯業地

中国の窯業地は全土に広がるが、日本への主要輸出港が中部の寧波であったため、ここに近い龍泉が最も多くなった主な原因であろう。また、明代になると景德镇の染付に移り、16世紀にはその製品が凌駕するようになった。それに合わせて国内でも有田で磁石が見つかり、磁器生産が可能となって、国内に市場が広がるだけでなく、中国の禁輸と有田磁器の技術進歩とによって海外へも輸出されていった。



常滑大甕(出土地不明)

おわりに

横芝光町は、千葉県内では小さい町である。そんな小さい町で考古資料は県内でも自慢できるほど、質、量ともに收藏している。それはこれまでの発掘調査が、大規模で数が多かったというだけでは到底説明できない。これはやはり地域的な特性があったと言うほかない。今回、中・近世の陶磁器を取り上げたが、これも多数にのぼり、とても全部を図録に載せることも、展示に出すこともできなかった。また、種類も多く、中には専門家に見てもらっても不明な物もあり、そんなに古い時代でなくても、まだまだ研究の余地がある、奥深い分野であることを改めて知らされた。ここに示した中でも、まだ異なる物もあるかもしれない。もし、ご存知の方がいらっしゃればご教示願えれば幸いである。

横芝光町出土の

中近世陶磁器

令和2年町民ギャラリー一展示図録

発行日 令和2年10月31日

編集・発行 横芝光町教育委員会

印刷 サンヨーメディア株式会社

